

「運慶」 鎌倉・興福寺中金堂再建記念特別展

東京国立博物館・平成館（東京・上野公園） 2017.09.26～11.26

「運慶」（うんけい）は、平安時代末期～鎌倉時代初期に活躍し、その卓越した造形力によりまるで生きているかのような写実性に溢れる「像」を生み出し、輝かしい「彫刻の時代」を牽引した日本で最も著名な「仏像作家」である。

仏師が活躍した時代は、源平の戦いなどがあり正に動乱の時代であったが、平家の焼き討ちによって灰燼に帰した奈良の「興福寺」や「東大寺」の復興に尽力するとともに、数多くの「仏像」を制作したことで知られている。

本展は、興福寺中金堂の約300年ぶりの再建を記念し、“日本彫刻の最高峰 上野に集結”の触れ込みで、800年も前の「運慶の作品22体」が展示されて、日本彫刻の神髄をたっぷりと堪能することができるものである。他に「運慶」の父「康慶」、息子の「湛慶」「康弁」ら親子3代にわたる作品を通じて作風の樹立から次代への継承をたどるとともに、最新の学術研究の成果も盛り込まれ、“日本彫刻の神髄を堪能できる史上最大のイベント”であるとPRされている。



《無著菩薩立像（むじゃくぼさつりゅうぞう）（部分）左》 国宝 鎌倉時代 興福寺所蔵。

像は右下を見るやや老貌の顔姿で、衣は襞に乱れのあることで、その肉体の老いを感じさせ、写実性と彫刻のたくましい量感をあわせ持っている。

《八大童子立像のうち制多伽童子》（部分）右

仏像の体の動きや目線がまるで生き生きして見えるのは、“仏に命を吹き込みたいという強い思いがあるからできること”とされている。

《毘沙門天立像》（びしゃもんてんりゅうぞう）
鎌倉時代 伊豆の国市・願成就院に安置。

像は、「鎧」をまとい激しい怒りを周囲に発散させるような表情をし、邪気を踏みつけて立つ姿である。

体格が堂々として、厚い胸板と引き締まった腹、しっかりと筋肉のついた腰によって、「鎧」を着込んだ姿にもかかわらず躍動感に溢れている。顔は丸くて、「眼」には玉眼を使用しているため、生き生きとした表現が細かく彫られている142cm大の像である。

武道家のような重量感が溢れ、誇張のないリアルな顔の革新的なデザインと技法の描写が特徴である。

